

おっぱまワイン寄席の10年

柳家喬太郎を迎えての「おっぱまワイン寄席」が、2013年度で10回となります。第1回が2003年の12月。まだ横須賀おっぱまワインはないのでその名も「おっぱま寄席」、2005年5月にワインができてから「おっぱまワイン寄席」になりました。NPO 法人アクションおっぱまの設立は2009年2月、実は今年の2月で5年になります。3月3日「おっぱまワイン寄席10周年記念特別興行」と銘打ち、柳家喬太郎とその師匠柳家さん喬を招いて親子会を開催、関東学院大学ベネットホールには約500人が集まりました。もとよりアクションおっぱまは落語の興行が目的ではありませんが、地域団体が落語会を催すところは意外に多いようです。皆で笑ってから課題に取り組もうということでしょうか。アクションおっぱまも10年を目指して新しい年度の活動に入ります。どうぞごひいき、お引き立てのほどを。（昌子住江/理事長）



追浜フィールドミュージアム～小さな国の風景

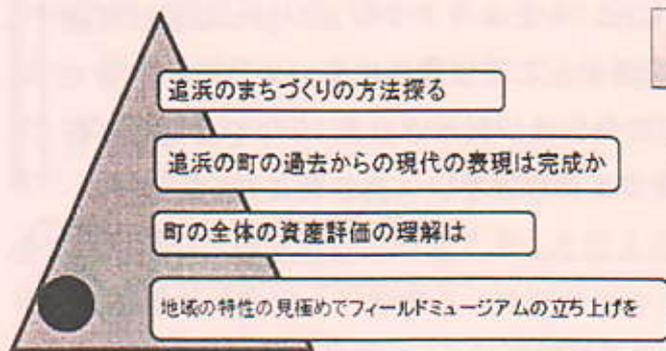
土地の評価が上がれば喜ばしい事です。追浜の地の評価が上がれば誇れる街として自慢です。追浜の地を、地域の人が今一度見直し、再発見、再創造すれば、新たな街づくりが生まれ、評価が上がります。街の再創造には、フィールドミュージアム構想の実現が良いと思います。

一例を見ますと、都市形態や地域特性で異なりますが、甲府の早川町は「やまだらけ」と地域の自然を生かしています。他に文化、歴史資産等を保存活用することで、街全体を後世に伝えることもあります。追浜でも、身近な地域特性をお宝として認識することがフィールドミュージアムの第一歩と思います。お宝は、地域の人々が再表現することで、誇りが芽生えます。さらに、その魅力を発信すれば来観者への共感を得ていけます。お宝には、海に近い夏島や貝山周辺（第三海堡）、鷹取山の石切り場、朝倉能登の守を代表する武士社会の歴史、近代日本の象徴「伊藤博文・夏島憲法草案の地」、現工業地帯の前身の海軍航空技術廠の歴史等あると思います。貝山周辺は、崖を掘った旧海軍のコンクリート製の軍事遺構、浄化センター裏山のジーゼルオイル燃料庫群、貝山地下壕の軍事遺産、旧海軍航空隊・予科練発祥の地、また貝山の700本の杏の植栽が開花し果実の実りが見られます。日頃から貝山の周辺案内には、深浦側に貝山縦断道の出口がなく散策には時間がかかり改善の取り組みが必要と思っています。一方、浄化センター内の通路も開放されれば、第三海堡への近道になります。 P.2につづく

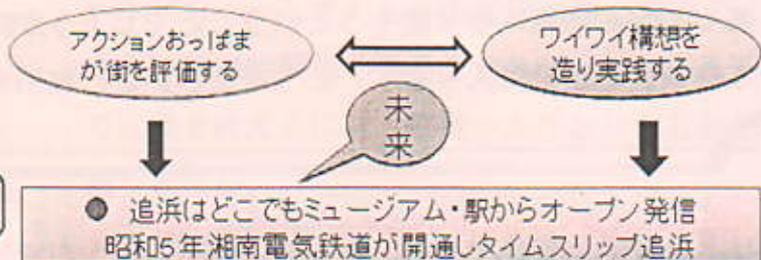


このような事をフィールドミュージアムに位置づけ行政、我がNPO、地域の人々、企業、学生等が連携すれば、資金をかけないエコな街づくりが出来ます。夏島はペリー提督一行が上陸してから160年の歳月が流れ、追浜の浜から水上飛行機が大正元年に飛行し100年が過ぎています。これら資源を地道に活かし、追浜フィールドミュージアム構想や目指す方向性を決め実現していきたいと思ひます。

(青木猛/副理事長)



クエッション・誇りを持てる追浜フィールドミュージアム(F・M)



◆ F・Mの創造のメリット・・・町はどこでも不思議発見・・・現状で薄れていく街の歴史・文化・景観等の変遷を伝える

➡ 学ぶ博物館的に見た追浜は・・・歴史文化の街

- ① 9500年前の夏島・貝塚や鉾切り遺跡
- ② 頼朝の鎌倉時代の範頼伝説・後北条朝倉能登の守
- ③ 幕末の徳川天領・ペリー一行の来航 (故郷ウエブスター島の夏島上陸)
- ④ 伊藤博文と明治憲法草案
- ⑤ 旧帝国海軍から太平洋戦争 海軍横須賀航空隊・海軍航空技術廠
- ⑥ 終戦と共に連合国軍進駐・・・朝鮮戦争が起こる
- 連合国軍が進駐した地であるが、現在、その匂いがない面白い街である
- ⑦ 朝鮮戦争と特需景気
- ⑧ モノづくりの原点・大工業地域・追浜工業会の進展 付随の商店街の栄枯盛衰
- ⑨ マンション王国・東町
- 追浜はフィールドの核を作れる要素があり観る・学・創造 による核と核を繋げれば、大きな展示館となる

➡ 意識のない追浜の資源を整理、表現しミュージアムの原点を探り、地元の人々が外部に発信していく特色

- ① 本市の他地域をけん引する先導事例とする
- ② 雇用を生む目標を当初から持つ (観光案内所・売店等の誘致)
- ③ 自己自慢に陥ることなく、シツカリした構想や企画をもつこと

★考えられるフィールドミュージアムのアイディアの要因 (テーマ)

- ① トンネルだらけ → 町の発展の要因
- ② 地下壕だらけ → 旧海軍横須賀航空隊等
- ③ 大きな工業団地 → 旧海軍航空技術廠等
- ④ 鎌倉幕府の歴史を持った海 → 艦船の景観や海路交通の利便
- ⑤ 幕末の舞台に → 徳川天領鷹取山、ペリー提督
- ⑥ 街の成り立ちに魅力 → 自然、工業、商業のバランス
- ⑦ 日本の飛行機の発展を担う → 旧海軍の飛行機
- ⑧ 追浜の歴史文化 → 石切り場、蒲谷の姓、雷神社の伝承、ハスや塩の産地等
- 核になる人、モノ、金を主役に、この街の地域住民が意識して新たな事を始めていく。
- 北の王国追浜は、横浜に隣接し金沢文化も融合した特異な街

コラム

館山市が赤山地下壕を遺跡として整備し見学出来るようにしたように、横須賀市も貝山地下壕を整備して戦跡として見学出来るように、市民の立場で働きかけることが必要なのだと思ひました。追浜地区の文化財や遺跡、追浜文化で「訪ねてみたい追浜」「住んでみたい追浜」に繋がると良いものです。

(高杉和枝/理事)

キネマフューチャー センターについて

2013年7月、シャッター通りと化した東京都大田区キネマ通り商店会の、空き店舗を利用して「映画を手段とした地域活性」というコンセプトでオープン。持続可能なコミュニティを目指し、以下3つの機能で展開。①地域交流拠点機能。子ども達やその母親、高齢者の溜り場としてまちに開かれた場所。新しい人の流れと、交流、まちに関わる意識を醸成していく。②仕事創出の機能。最近注目されているコワーキングスペースとして、地域の新しい働き方を創出、コミュニティビジネスを目指す異業種の人たちが集う場。新しいイノベーションを生み出し有機的な発展をしていく。③フューチャーセンターとしての機能。映画を観て、まちの未来を語る場。「循環型地域活性化」の実践。商店街の人だけでなく多様な人が集い、対話してまちの未来を描き、行動していくきっかけづくり。次世代を担う子どもたちや学生にも広く利用して頂くしかけづくりをしている。

(菊地真紀子/会員)



蒲田のキネマフューチャー センターを訪ねて

会報の編集委員をやって下さっている菊地さんが拠点を作ったということで見学方々編集会議を蒲田でやりました。

追浜コミュニティとは、①京急の駅同士②空き店舗活用③経産省の補助金を作って整備など共通点がたくさんありました。やはり、若い高橋理事長と菊地さんが中心なのでコワーキングスペースという拠点は若々しい雰囲気でした。また映画をキーワードにしているので集まる仲間も若い人も多いようでした。コンセプトも創業支援、企業支援です。ボランティアの拠点とは少し趣きも違うようでした。

追浜と蒲田の拠点は、違いがあるからこそまたつながりを持ってもおもしろいのではないかと思います。(吉田洋子/理事)

映画のまちづくり

市民の手で映画の上映スペースを作ったり、ロケ地を誘致し映画づくりを支援したり、実行委員会方式による映画製作など各地で映画とまちづくりを結ぶ動きがあります。観る一撮る一創ると多角的な活動や、地域の資源を掘り起こし、画像として広く伝えようとするプロセスがまちづくりと重なるからでしょうか。追浜にも映画にしたい場所やネタがあるのでは。(昌子住江/理事長)

2つの天神橋

追浜あんず通信編集会議を菊地さんの事務所で行いました。事務所は蒲田にあります。会義の席で天神橋と言う同じ名称の橋が追浜と蒲田と両方にあるとのこと。2つの天神橋を比較して多少なりとも関心をおよせ頂ければ幸いです。

追浜の天神橋は鷹取川にかかる橋で、追浜駅から左側の銀座通りを、歩いておよそ10分位で着く。橋幅は約7メートル、長さ約15メートルで、この橋では今下に流れる河川の姿は横須賀市の浸水対策工事で見えにくい状態になっている。この橋の天神は地名に由来する、と思える。相模国三浦郡浦郷村「字地書上（あざちかきあげ）」（戸籍法に基づき明治16年浦郷村戸長が50の地域名の説明及び地図を添付して神奈川県令に提出した公文書資料）に、字天神、字梅田、字夏島、字追浜などが記載されている。この地図で字天神は今の天神橋を渡って室の木公園手前までの地域一帯を指しているように思える。そして、横浜創学館高等学校前の県営追浜第2団地あたりに旧天神社があったのではないかと推測される。そこでは「松樹十数繁茂せり」と「字地書上」は記載している。現在は天神のように消えた地域名、浦郷村の海岸「追浜」に横須賀海軍航空隊が大正5年に開設されるなどで浦郷の地名よりも追浜が全国的に高まった。

キネマフューチャーセンターは蒲田キネマ通りにあります。昔は、いかにも映画館がいくつもあったのではないかと思わせるような雰囲気漂わせるような通りです。室内はアクション追浜より広くゆったりして、仕事がし易い感じがしました。省エネのためか、もう少し全体的に明るい照明が欲しいと思いました。(続)

(内野忠治/監事)

会員の声

大型マンションの開設により、追浜の人口が増えています。しかし、超少子高齢社会であることには変わりありません。その十分な対策がとられないまま、時は過ぎていく。歳のせいで、特に高齢者問題は自分の近い将来のこととして、切実に感じられます。

話す相手もなく一人で孤立している人。足腰が弱って日常の買い物にも不自由な人。核家族化して近くに親族もいない人。介護保険等の制度で国や市がカバーしてくれるのはほんの一部です。さらに経済的問題もあるとすれば、住み慣れた町で生涯を終えるには、町内一人ひとりの互助しかありません。

孤立を防ぐために、近くて気軽に行かれる高齢者サロンをもっと作れないか。配達を含めた買い物サポートの仕組みを、町内の商店と住民ボランティアで作れないか。こんなことを、1町内だけでもいい、小さな単位から作って発展させられないでしょうか。



それ誰がやるの？元気なあなたでしょ！

(櫻井一宏/会員・追浜地区社会福祉協議会)

編集後記 2014年1月30日(木)に編集委員の一人である菊地さんの拠点にお邪魔し、7号の編集会議を行いました。また今回は追浜フィールドミュージアム特集にしました。皆様どうぞご意見をください。(吉田)

追浜あんず通信 2014年4月発行 7号

発行 特定非営利活動法人アクションおっぱま
〒237-0066 横須賀市追浜町2-13
TEL 046-865-2625 FAX 046-866-2790

・発行人 昌子住江

・編集 内野忠治/菊地真紀子/昌子住江/吉田洋子